

ウォーキングの文化史

——イギリス人はいかに歩き、何を生み出したか——

中 島 俊 郎

私たちが歩くと足跡を残すと言いますが、じっさい人間の歩いた「跡」はのこりません。雪原にしるされた足跡でも雪がとければ消えてしまいます。人間の行動が時とともに消えてしまうのは何も「歩行」だけに限ったことではありません。悲しいかな、ほとんどのことがらが私たちの認識の表層から消え去ってってしまうのです。逆に言えば、だからこそ文化史のテーマとして、掘り起こしていく価値があるのかもしれませんが。私たち人間はなべて、歩きながら生を築き上げていく存在なのですから。

1 「歩く」という意味

歩くことの身体性 さて、私たちは「歩く」という行動をことさら考えようとはしません。「息をする」こととほぼ同じくらい自然なことだと心得ています。でも少し考えれば、歩くという行為にはとてつもない意味があるとわかってきます。たとえば「しゃべること」と対比させて考えてみれば、その間の類似点がよくわかります。何の目的も無く、話題・内容も特定せずに自由に喋りつづけると命じられれば、私たちは大変な困難を覚えます。歩行も然りです。無目的にどこへでも好きなように歩き続けろ、と言われて窮しない人はいません。とうてい歩くことなどできない。つまり、「歩くこと」は私たちの精神と密接に関係がある、きわめて意識的な行動といわねばなりません。

また歩く形態、歩く姿勢を考えてみましょう。私たちは足を広げてまっすぐ立ち上がり、それから5度くらい前方に上半身を傾斜させて歩をすすめます。身体の重心を巧みに取りながらその運動を持続させているのです。先に歩行をきわめて自意識に満ちた行為と申し上げましたが、身体的にも意識せずにはできない行為なのであります。細いロープの上を軽々と歩いていく人がいます。綱渡りの芸を披露できるのは重心の在^{あり}処を身体的に熟知していなければたちまちのうちに地上にたたきつけられることとなります。以上のようなことから、「歩く」ことが人間の全人格を傾注しなけ

れば成し遂げることができない行為であると理解していただけたと思います。

ファースト・ステップ 何気なく私たちは歩いていますが、私たち人間は生まれてすぐには歩けないのです。一気に歩き出せるほどそんなに簡単なものではありません。だから「歩き初め」というのはどの民族にとっても意義深い行動として認知されています。とりわけ美術のテーマになっています。画家はこぞってこの「歩き初め」をテーマとしてとりあげます。母親や乳母が手を広げて、「さあ、こちらへいらっしやい」とわが子にむかい、励ましの声を投げかけます。例に欠かないほどの画家も描いているテーマなのですが、ゴッホの作品(図1)は典型的な例になるでしょう。人間が歩き出す瞬間を、全人生の一步として描き切っているからです。当時、ゴッホは精神が錯乱して精神病院に入院していました。ミレーの『ファースト・ステップ』を見て、非常な感銘を受け自らも描いてみようと思いついたわけです。弟テオから油絵の具を差し入れてもらいゴッホは描き出します。



図1 ゴッホ『初めの一步』

この絵画の特徴的な点は場面を早朝に設定しているところにあります。言うまでもなく早朝はまだ何ものにも踏みしめられておらず、わが子の歩みと軌を一にしています。親である貧しい農夫のふたりは早朝の光を浴びて、絵具の「白色」が早春、早朝を雄弁に物語っ

ています。朝の空気、大気、灌木、野菜の茎など——すべて白を基調にしています。生まれたわが子の歩き初めを、人生の第一歩を、朝の畑仕事というしかるべき環境におき、どの色にも染まっていない無垢な白色の世界に封じ込めたところにゴッホの画才があります。

歩行と時間 歩行の次の段階へ進んでみましょう。これは紀元前3世紀に作成されたクレタ島の壺(図2)です。「ペビー・ウォーカー」という歩行器が描かれています。われわれ人間は生まれてすぐには歩けませんので、これを補助にして徐々に歩くすべを身につけていきます。年齢を重ねますと、私たちは赤ん坊に戻っていくと言われますが、足腰が弱くなり、再び「歩行器」のお世話になります。「ファースト・ステップ」から老人の「歩行器」まで、歩くことの意義を考えますと、時間＝歴史と歩行が密接な関係があるとお分かりでしょう。ここで歩く行為がはっきりと歴史の中に組み込まれていくことが理解できます。



図2 「クレタの壺」に描かれた歩行器

考えてみますと、私たちがどこへ向かい、なぜ歩いていくのかという問いに向かい合おうとすると、「スフィンクスの謎」を思い出さずにはいられません。スフィンクスは謎を發します——「朝4本足で、昼間は2本足になり夕べには3本足になるものは何か」と。ご存知のように、答えは「人間」なのですが、赤ん坊のときは四つん這いで、青年期は2本足で歩き、やがて老年をむかえ杖の助けをかりて3本足になるという。こうした「スフィンクスの謎」にひめられた時間の周期性を見ますと、歩行というものが時間のサイクルのなかに組み入れられるのも不自然ではないでしょう。でも、どうでしょうか。杖をついた老人を思い描くとつい達観した気持ちになりますが、私たちは巧みに重心をとって誰もが綱渡りをできないように、意外と歩くことがうまくないのではありますまいか。人生とい

う綱のうえで重心をとる巧みな達人になれずに、大部分の人が生涯を終えてしまいます。でも、それでいいのだとも一方では思います。迷いながら歩いていくのが人生だからです。

人間が歩き出すとき 歩行は多面的な文化要素を束ねていろいろな意味をおびてくるのですが、歩くために歩く、歩くことが喜びとなる、というような今日的な意味でのウォーキングは18世紀末までは現れませんでした。そもそもイギリスという国は歩くことにきわめて不寛容な国でありました。馬車などの移動手段がない時代、貧しい者はどうしても歩かざるをえませんでした。移住とか逃亡、何らかの刑罰のために歩く以外、つまり歩行による旅行、目的をたずさえて歩行することは1780年代まで現れませんでした。歩行が積極的な意味を帯びだすのが産業革命の時代であったというのは興味深い現象と言えましょう。同時に起きた交通革命は、まだ鉄道の時代になっていませんが、駅馬車、郵便馬車の時代でした。速い馬車でしたらうように時速70キロくらいで走ります。これは人間にとって今まで経験したことのない速度です。時速40キロくらいの馬車に搭乗していても、新幹線に乗っているような筆致で描かれています。とてつもない速度の時代に人間が歩き出したことは、じつに好奇心を揺り動かされるではありませんか。

2 祈りの歩行

巡礼という歩行 とはいえ18世紀になるまで「歩行の文化史」の側面をいどころような事例がないわけではありません。それどころか多すぎるくらいの事例が残っています。先にイギリスが歩くことに不向きな国であるといいましたが、ヘンリー8世時代の1531年あたりから自由な歩行を国が禁じていました。農民などの移動を非常に嫌いました。浮浪者取締法という、土地を離れる者を取り締まる法律が威力を發揮していた。浮浪者は見つかると即刻、居住のある土地へ引きずり戻されるか、鞭打ち、処刑という厳罰でした。この法が永く拘束力をもったのです。それゆえ、歩いて移動することは社会的にも経済的にも卑しい身分の者の行為だと見なされたわけでありました。

ウィリアム・ウェイの巡礼 とはいえ歴史の間隙をすりぬけて歩行する人も多くいました。そのなかでも記憶に残るのは巡礼にともなう「歩行」です。15世紀、オックスフォード大学の教授であったウィリアム・ウェイ(1407?-76)という人がエルサレムへ巡礼に旅立

ちます（1458年、1462年）。全行程すべてを歩いたわけではないが、できるだけ自分の足で歩こうとしています。やがてカトリックからプロテスタントに宗派が変わり、儀式的なことは廃止されますが巡礼だけはそれでも存続しました。文学の世界ではチョーサーの『カンタベリー物語』（1387-1400年）、ジョン・バニヤンの『天路歷程』（1678年）がつとに有名で、後者は寓意の物語でクリスチャンという主人公が伝道者の導きによって救いを求めて歩き出すという枠組みをそなえています。前者は英詩の父と呼ばれる作者の手になった中世英文学の傑作ですが、登場人物が旅をしながら、物語をつむいでいくという文学の形式は後に続くイギリス文学にすぐれた物語枠を与えることになります。

私がボドリアン・ライブラリーで調べたウィリアム・ウェイの写本には地図（図3）と詳しい旅程がついていました。歩くという苦難を身体に加えるほど神の御許へと近づくと考えたのだろうか、ウィリアムもよく歩いています。歩行が克己の精神に裏打ちされて、エルサレムへたどりつく。英語とラテン語の混交文で書かれた写本は、今日の巡礼、卑近な例をあげれば「四国八十八ヶ所巡り」となんな変わらない。キリストの足跡、説教のときに用いた台座、説教の内容などキリストの奇跡を求めたどり、聖都へ旅をする。旅土産も忘れていないのは今日と同じです。神の聖地がまるで軍事基地のように一定のところしか参拝できず、立ち入り禁止の場所が多く、ほとんど規定のルートを進まねばならないのにはまさに一驚をおぼえてしまいます。



図3 ウェイの巡礼地図

現代の巡礼 巡礼は世界の宗教に共通に見うけられますが、その精神が今日もいささかも色褪せていないのも決して偶然のことではない。オックスフォードにはアシュモリアン・ミュージアムという有名な美術館があり、世界の宗教を巡礼という切り口で理解しようとする『聖なる旅』という特別企画展が催されています。

した。いろいろな宗派に見られる巡礼が紹介されているのですが、私の興味をもっとも惹いたのは、キャロラインという女性がたどった巡礼です。

キャロラインの巡礼 キャロライン・フレンドは普通の主婦であり、なんら波乱のない人生をおくっていました。それがある日突然、その平和な日常が破られてしまいます。オーストラリアに留学していた息子が交通事故に遭い瀕死の重症を負う。次に娘が強度の拒食症を罹り生死を彷徨する。そうこうするうちに実母がむごたらしい癌にかかり悶死してしまう。最後には永年勤務した会社から解雇、夫との離婚が待っていました。この世の重荷をすべて背負ったキャロラインは、死を考えることもできないほどの生きた屍状態におちいってしまいます。



図4 巡礼するキャロライン

だが、ある日、未知の人のすすめにより、スペインの聖地までの巡礼の旅に出る。見ず知らずの10人ほどの巡礼者にまじり、ただひたすら歩き続ける。そのふれ合いの中で感謝の念が再び沸き起こり、山間にある修道院の静謐の中に、自己を再生させてみようとする活力がわき生きる息吹を感じる（図4）。聖地にたどり着いたときには自分以外の他人をも思い遣る優しさが全身を満たしていた。中世の時代と同様、混迷をきわめた状況下、祈りをささげ歩くことで巡礼がキャロラインに生きる力をもたらしたのです。

ローマへの道 錯綜した人生から自己を救済する手段の一助として巡礼に赴いた人間として忘れてはならない人物がいます。巡礼という営為から自分の作家としての生き方を模索した文学者もこうしたキャロラインのような無名の巡礼者の系譜につながる一人であり

ました。20世紀に多くの著述をものしたヒレア・ベロック (1870-1953) という作家がいます。人生に疲れた作家が1902年に書いた『ローマへの道』は、巡礼の精神でつらぬかれた「救済の書」といえましょう。ベロックは200冊以上の本を書いた多作の人でありベストセラー作家でしたが、自らすすんで筆をとったのはこの作品のみであると述懐しています。歩くことの意味が自分でも分らずただひたすら歩いて求道する姿は、中世の巡礼者となんら変わりません。その姿こそきわめて印象的であります。

3 自己実現としての歩行

トマス・コリアト 巡礼という「祈りの歩行」というものがありますが、これは先ほど言及しました18世紀末までにイギリス文化史の中では興味深い人が何人か出てきます。印象深い人間の中にトマス・コリアト (1577-1617) がいます。シェイクスピアとほぼ同じ時代の人であります。その人が自分の名声を得ようとして旅に出ます。名声を求め、また詩人として何とか世に出たい、これは文学青年の常であります。彼はその当時、人々がもっともあこがれたベニスに向けて、歩き出します。最初は財力に余裕がありましたので移動手段として馬車を用います。歩くことについてまだ全然目覚めてはいません。ところがベニスで2週間滞在し、金を全部使い果たしてしまいます。往きは歩いたり馬車に乗ったりとどり着いたのですが、帰る旅費が尽きてしまい歩いて帰ることになりました。しかし往きとは全然違う気持ちをコリアトは覚えます。

これは800ページもある『クルディティーズ』(1611



図5 コリアト『クルディティーズ』

年) という旅行記の表紙 (図5) ですが、その旅行記には石碑、墓碑など碑銘がことごとく記録されています。つまり今日で言えば現地でする旅行写真のような役割をその記録は果たしています。現代の目からすれば詳細にわたりすぎて読んでも面白くないのですが、旅行する人にとっては情報として大変貴重な記録となります。その後起こってくる、フランシス・ベーコンなどの権威的な精神性を得てイギリス貴族がこぞって参加するグランドツアーという制度があります。そのガイドブックに本書はなっけていきます。つまりコリアトが歩いて記録した、この大部な本はベニスまでの、そして自分の故郷に帰るまでの多大な知見を提供しているのです。

くたびれた靴 そしてこの旅で着用していたコリアトの靴はチャーサーの時代からほとんど変わってないのです。分厚い底の肉厚の運動靴に私たちは慣れていますが、当時の人の皮靴というのは本当に薄くて軽い。歩いて帰りましたので自分のことを旅行する王であると唱えましてフォトコクという村の教会に月桂樹を付けてこの靴 (図6) を祭壇の上に奉げました。現在も奉られているという情報があり、ぜひとも写真に撮りたいと思い、車で行ったのですがどこにも見当たりません。教会の牧師に聞きましたら、19世紀の最初までは保存されていたという記録は残っているのだけれど、何時なくなったか分からないということでした。徒労におわり失望してオックスフォードへ帰ってきました。そしてカレッジの同僚に「あの靴はなかったよ」と告げたら、その同僚はこともなげに「そりゃ、くさい靴だから捨てたんだらう」と返答し、さらに深い失望につき落してくれました。ともあれよく歩き疲れた靴だったそうです。



図6 <聖なる靴/くたびれた靴>

ロング・ウォーク やがてコリアトは詩人として起つ決意をして、当時インドのボンベイ (現、ムンバイ) というところに、今度は全行程、ロンドンからずっと



図7 象にまたがるコリアト

歩きつづけます。海は仕方ありませんが砂漠を横切つてアジアへ入りました。そしてようやく現地へたどり着くわけです。最後にはインドの奥地で熱病にかかって客死してしまうのですが、その間に友人と母親に長い手紙を送っています。コリアトがなぜインドへ行ったかといいますと、名声をうちたてることもそうですが、一番大きな望みは象に乗ること（図7）でした。当時してみれば今日の私たちが竜にでも乗るようなものかもしれません。自からムガル帝国の国王に願いを聞き入れてほしい、と詩人ですから韻を踏んで朗々たる演説をすると、思いのたけが通じ象に乗ることができ、また詩人としても名声を博すこともできました。コリアト・ブーム どうも近年、このコリアトの旅行記がイギリス人の心をうち、その足跡を訪ねるサイトがインターネットに2, 3見られます。関連書が5冊も出ています。コリアトの足跡を訪ねて同じように歩いていく、航空機時代の今日では哀愁をさそう旅であるのかもしれませんが。

ジョン・テイラー 当時ロンドンの文人たちはマーメイドクラブというタバーンに出入りしていました。文学サロンです。シェイクスピアやベン・ジョンソンもこのクラブに出入りしていました。そこでコリアトが「歩く」ことで詩作をうまくしたという一報を聞き、何とか自分も世に出たいと願う詩人がいました。それはテムズ川の渡し舟の船頭をしていたジョン・テイラー（1580-1653）という三文文士です。そのテイラーがコリアトのまねをして、歩くことによってまた詩を書く。そして歩くこと詩作とが結びつき、徐々にではありますが、大きな伝統になっていきます。そのように、歩くこと、詩作することによって自己を作り上げていく、

自己実現という営為と歩行がこの時代に芽生え、18世紀末まで着実に根づいていくことになるのです。

ドイツから来た詩人 自己実現と言えば、ドイツのちょうどロマン主義の時代、イギリスのロマン派運動の前ですが、一人のドイツ人青年がジョン・ミルトン（1608-74）という、『失樂園』（1667年）を書いたイギリスを代表する詩人にあこがれ、なんとかミルトンの生まれた故国で『失樂園』を読みたいと強く願いました。懐のさびしい青年は馬車に乗る金を持ち合わせませんので、歩いてイギリス全土を2週間旅しました。その克明な記録が旅行記（『1782年にあるドイツ人がした英国徒歩旅行』）に記されています。その青年カール・フリップ・モリッツ（1757-93）の記録を見ますと、いかに当時、徒歩旅行者が忌避され嫌がられていたかが分ります。

まず歩いて旅するような旅人を泊めてくれるところは皆無です。連夜の野宿に疲労困憊し、空腹も限界で風呂にも入りたいためですから、何とか今晚だけは泊めてくれと宿屋の主人に哀願するのです。が、宿の主人は頑として受け容れようとはしません。ソファに横になるだけで一泊分払うからと討ても、応じてはくれません。それくらい、歩いて旅をするということは1770年代、80年代では、まだまだ禁じられた行為であったということがよく理解できます。しかし、このドイツ人のモリッツもイギリスを歩くことによって、自分は文学者として立つ決意をし、ミルトンの雄大な詩を読むことによって、ドイツロマン主義の大きな星の一つとなっていく。

ウォーキング・スチュアート やがて歩くことが18世紀末に盛んになるまでに、意味を帯びた人物が出現します。フランス革命の動乱時に現れたウォーキング・スチュアート（1747-1822）（図8）です。この人は生まれながらの放浪癖があったのか、小さい頃から落ち着きがなく、小学校、中学どちらも放校処分にあうほどで、父親はこんな子はだめだと締めてインドの軍隊に入れてしまいます。そのインドの軍隊から彼は抜け出し、歩いて中近東の砂漠を越え、まだ地図に記録されていないエチオピアやコンゴの中まで踏み入っていく、やがて北上し、ロンドンまで歩いて帰りました。

そのときはあまり金がないということもありましたが、世界を広く見てやろうというような、おそらく今日のバックパッカーの若者と同じような気持ちで歩き回り、そのスチュアートが革命や動乱に必ず姿を現して、まだ大学生であったウィリアム・ワーズワス（1770-1850）などに政治の重要性を説いたような記録



図8 ウォーキング・スチュアート

が残っていますが、本人はもう戦争、戦争で明け暮れた世の中を絶望し、世界を歩き回り、なんとか世界平和を説こうという、当時としてはなんとも崇高な願いを彼自身は胸に抱いていました。そこで世界中を歩き始めるのですが、スチュアートが足を降ろしてないところは、南米の一部と中国、日本くらいです。驚くことに他の国々はすべからず踏波したのです。

アルメニア人風の頭巾を被って自ら作成したパンフレットを売りさばき、世界平和を説き、人間はなぜ戦争を起こすのか？ どうしたらその戦争を避けることができるか？ ということを説教して、街角に立って平和を広めようとします。ロンドンでは、変人扱いされ投石にあい、自分の考えが受け容れられないことが分かり、カナダ、アメリカへと渡っていきます。当時、ニューヨークで発行された新聞も彼の到来を報道しています。かなり有名人でもあったわけです。

しかしスチュアートの説く平和論はきわめて奇怪なためか、聴衆すべての耳目を集めるところまではいきません。パンフレットが売れなければ生活費が捻出できないため、いかに地球破滅の日から人類を救うことができるか、等々と訴え、何とか本を売ろうとします。すべて手帳くらいの版型の本で、30、40ページくらいの小冊子です。スチュアートは自分の死期を悟ったとき、売れ残った多くの本を友人に託し、やがて英語も減じるから、これをラテン語に訳して土の中2メートルくらいのところへ埋めてほしいと遺言し、彼は亡くなります。同時代の人々はたえず歩き回っていた奇妙な鉄人ウォーキング・スチュアートを忘れることなく覚えていたそうです。

ジョン・テルウォール このように、何か自分の哲

学的思索を説いて回るという人に、もう一人重要なロマン派の詩人・雄弁家があります。ジョン・テルウォール(1764-1834)という人です。あまり肖像画は残っていないのですが、テルウォールは動乱が何時起きるとも知れず、また政府が転覆し、いつフランスが攻めてくるか分からないというような混迷の世に生きていました。政治がどうなるか、動乱の時代をどう生きるかというウォーキング・スチュアートと同じようなパンフレットを作って売るために、イギリス全土を駆け巡ります。そこでテルウォールは面白いことを思いつきます。群集に向かって説教するわけですが、腹式呼吸と雄弁術がいかに結びついているかという事実を発見します。呼吸法と英語の発音との関係を書き表わした本を出版します。それは音声学の本だといわれていますが、国会議員たちに雄弁術を指導していました。国会でいかにうまく演説するかという術を教え、収入を得ようとしたのです。テルウォールの弟子になった人はたくさんいます。また全国を歩き巡りながら、『イギリス逍遥記』(1793年)という三巻本を書きます。どこで、どのような人に出会ってと、こと細かく記述しています。最近、テルウォールの政治的主張はロマン派の進歩思想を告げるものとして大いに注目されることとなりました。残されたこの観察記録は今日、当時の社会を知る得がたい記録にもなっています。

4 創作としての歩行

哲学的な思索を重ねる歩行は、やがては詩作をする歩行へと展開していきます。英語の詩は「弱強というアイアンビクのリズム」が基本リズムであり、それは歩くリズムと酷似しています。アリストテレスの逍遥学派が歩きながら考えるという思索のために歩行を実践したのと同じように、イギリスのロマン派詩人たちは歩きながら自然と向き合い、詩を紡ぎ出していました。こうした内的な運動が歩行によって起きていたのと同時期に、文化的現象が歩くことに大きな変革をもたらそうとしていたのです。この感性の変遷はツーリズムと深くかかわりあっていました。

風景画と庭園 グランドツアーという研修旅行ともいべき旅に出ているイギリス貴族の子弟たちは大陸文化の精を故国に持ち帰ります。珍重されたのは、ニコラ・プーサン、サルヴァートル・ローザ、クロード・ロラン、ガスパー・デュゲといった過去一世紀も以前に流行した、おどろおどろしい自然を描いた風景画家の作品群でありました。本来ならばそこに描かれてい

る廃墟や古城、荒廃した庭園などを持ち帰りたいところですが、残念ながらそれはかないません。そこで絵画とあいなるわけですが、これら一連の絵画が甚大な影響をイギリス文化にもたらします。

豊穡なヨーロッパ文化に対して、イギリスには誇るものがあまりありませんでした。古代のイタリア、ギリシア文化にねたみに近いほどの憧れを抱くのも無理からぬところです。ところが、唯一、胸をはって声高にこの文化の精髓を見よ、というものがありました。それは従来の幾何学庭園に対して、巧みに自然をしつらえた「風景式庭園」です。この庭園文化は英国から発信され、アメリカ、モスクワまで「輸出」されました。それどころかギリシア、イタリアへと先祖帰りまで果たしたのです。

この庭園文化がもたらした文化的余波は、何よりもイギリス本国をもっとも強く揺らしました。芸術全般に、といっても過言ではありません。ナポレオン戦争のためにヨーロッパへ渡ることできなくなり、こうした風景画、庭園文化に育まれた感性は勢い自国へと向かいます。ただ、いかんせんイギリス本国には「荒ぶる自然」がありません。そこで見出したのが湖水地方です。またウェールズを流れるワイ川流域でありました。グランドツアーで旅人たちが涵養した「眼」をもって自国スコットランドやウェールズの「荒々しい自然」を理想としてかかげたのであります。つまりツーリストたちはこぞってあの「風景画」に描かれた自然を求めて湖水地方などを彷徨しはじめたのです。

もうお気づきのように、逆転現象が起っていたのです。はじめに「風景画」が理想としてあり、それに即した「自然」を探求したからです。これが「ピクチャレスク」というイギリス独自の美意識です。当時、幹線道路は荷馬車で溢れていましたから、手つかずの自然のなかを人々は歩き回り、〈ピクチャレスク〉美を探し求めました。

この人工的な美の探究に欠かせない道具がありました。「クロードグラス」です。画家の名前を冠したこの手鏡は、お気に入りの画家の色調に合わせて自然を見ることができます。今ここにお見せしている絵(図9)から分かりますように、最初からセピア色がかった自然をつくり、それを鑑賞するわけです。今日からすれば何とも奇妙な「自然鑑賞」ですが、ピクチャレスク・ツアーを生み出し、人々は山、森の中を「ピクチャレスク」を求めて歩き回りました。笑ってばかりおれません。というのもここに現代のツーリズムの「原型」があることを認めるのは容易だからです――

旅行の出発前にガイドブックをつぶさに読み、いざ現地に赴くと、私たちは「ああ、その通りだ」と安心して、旅の満足を覚えているからです。

ピクチャレスク・ツアー この「ピクチャレスク」という美意識は、エドモンド・バーク(1729-97)が称揚した「サブライム」という、恐怖を覚える美と密接な関係にあります。バークの『崇高と美の観念の起源』(1757年)はヨーロッパへも波及し、大哲学者カントをして崇高美論を書かせます。〈ピクチャレスク〉美を喧伝した人は、ウィリアム・ギルピン(1724-1804)という教師、牧師でした。このアマチュア「審美家」は盛んにピクチャレスク・ツアーの本を書き、フランス語、ドイツ語にまで翻訳され、〈ピクチャレスク〉美の一大教祖として祭り上げられます。



図9 〈ピクチャレスク〉美

こうした人工的な操作を施した美意識ですから、人々の心に深く根ざすことはない、とほぼ予測されるのですが、このピクチャレスク・ツアーから大きな影響を受けたのは、ほかならない「ロマン派の詩人」たちでありました。ワーズワス、コールリッジ、キーツ、シェリーという詩人たちは、若い頃、盛んにピクチャレスク・ツアーを試みて、自然のなかを逍遥しています。そして、この〈ピクチャレスク〉美からの離反こそ自らの「詩人」としての旅立ちとなったわけです。

とりわけワーズワスと歩行の関係は密で、歩かずには詩作できないほど緊密なものでした。「歩くこと」が詩のリズムを奏でていくという詩作の根源に根ざした営為となっていました。コールリッジなどは歩かなくなった後、明らかにその作風に変化をきたしています。哲学者肌のコールリッジは自らの歩行と詩作の関係を丹念に「ノート」に書きつけています。また、ワーズワスのもとを訪ねてきたロンドンの文人トマス・ド・クインシーが、詩人たちの猛烈な「歩きぶり」を目の当たりにして感嘆の声をかくそうとはしませんでした

〔『湖水地方と湖畔詩人の思い出』[1834-40年]〕。

湖水地方は歩行のコミュニティであったともいえるでしょう。ワーズワス兄妹は13マイル（20.8キロ）の距離を往復する（41.6キロ）ことを日課とするくらい苦も無く歩行していました。ウィリアム、ドロシー、コールリッジのもとへ遊びに来た詩人ロバート・サウジー（1774-1843）はたえず時速3マイル（時速4.8キロ）で歩き、しかも同時に読書できると主張し、本を閉じれば時速4マイル（時速6.4キロ）で歩いてみせると豪語しています。晩年の肥満体から想像できませんが、コールリッジ（1772-1834）はこうした誰よりも健脚を誇っていました。速度、距離においていささかも劣らない活力でもって、湖水地方に群がった文人の誰よりもすばらしい脚力をそなえていたのです。

ロマン派詩人たちがワーズワスを中心に集まり、自然のなかを大いに歩き回った記録は、詩人たちの追憶記、書簡、日記、備忘録などに詳細に残されています。そのなかでもコールリッジの場合は検討に値します。「歩行した」という具体的な事実にあふれていて、それが詩作品と直接結びついているからです。

英詩史上の革命的詩集となった『抒情民謡詩集』（1798年）を、共著で世に問うた翌年の1799年11月、ノーサンバーランドからダービシャーへ南北に連なる高地ペナイン山脈を横切り、湖水地方をコールリッジに実体験してもらうべく、ワーズワスは親友を誘います。この徒歩旅行が両詩人にとって大いなる意義をもつわけです。道中、ワーズワスは、その後年滞在することになる「ダブ・コテッジ」という家屋を見出します。ふたりの詩人は雨をも厭わず、歩行を続け自然を絶賛する一方、ウィンダーミア湖畔に群生しはじめた醜い新興の建造物に嫌悪の情をぶつけています。

荒涼とした自然に初めて接したコールリッジは、その感激を「未知の風景美にどれほど私が感銘を受けたか、とうてい、いや絶対に私の感動は表現できません」と、ワーズワスの妹ドロシー（1771-1855）へつつみ隠さず伝えています。同時期に自らの印象を記した『ノートブック』（1794-1804年）には、「霧のなか躍る陽光、プラトンの光る陰鬱…」と書き記し、歩行から得た印象が変容をしはじめ、詩的言語へと昇華されつつある過程を理解できるのです。これほど歩行と〈詩作／思索〉が混然一体となっていく悦ばしい例はじつに稀です。

歩く女性 こうした詩作と歩行の関係をさぐるとき、逸してならないのはウィリアムの妹ドロシーの存在です。ドロシーは兄ウィリアムと同居して身近に創作を

見届けた人でもあります。ドロシーが残した日記を見ると、「歩かない日」がまず見当たらないくらいこの兄と妹は「歩く人」でありました。ドロシーは兄の観察者だけではありませんでした。ワーズワスの詩とドロシーの日記を比較してみると、日記がもとになって詩作されたような作品が数多くあります。

雨天でも歩くことを止めようとはしなかったドロシーは、女性として歩く意義を高らかに宣言した輝かしい人でもありました。男性でも歩き回ることがはばかれた時代に、ドロシーは山中、森林を歩き回りました（図10）。こうした態度を見かねた叔母がドロシーの歩くことを諫める手紙を書きました。

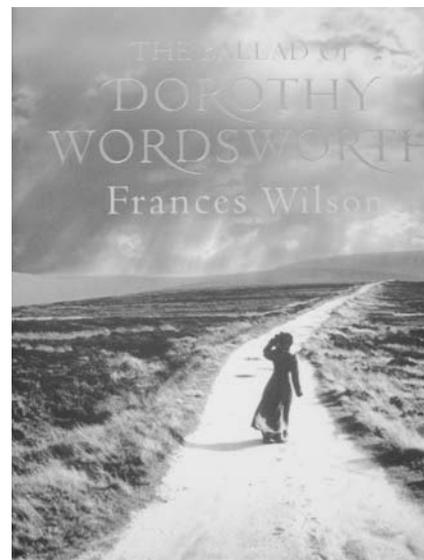


図10 『ドロシー・ワーズワス』表紙

ドロシーの返信の中に込められた「反逆の声」こそ歩行の新しい時代の到来を示しているものでありました——「叔母様、どうして歩くことがいけないのですか？ 神様がすばらしい身体を与えてくれたというのに。またこんなにすがすがしい自然につつまれているというのに。なぜ歩くことが反社会的だと言われなくてはいけないのでしょうか」。いつも内気で自分を前面に押し出そうとはしなかったドロシーとしては異例な態度です。でもこのドロシーの声は、女性が歩くというだけにとどまらず、歩く人すべてに勇気を与える声となったのは歴史的にみても首肯できます。

まだハイキングという言葉もありませんでした。ピクニックという言葉はありましたが、今日のように野原を歩き回ることを含意していませんでした。小説家ジェーン・オースティン（1775-1817）の時代、ピクニックは「家のなか」で行われるパーティを意味していました（この言葉自体はフランス語から1748年に英

語に移入されました)。

歩行が反社会的な行動であると考えられていたがゆえに、ロマン派の詩人たちはこぞって歩いたという一面は否定できません。反社会的な行為として知りつつ、実践することは既存社会の価値観を転倒させることに通じたからです。いわばこうした詩人たちが歩き回ったのも、それは、詩人の示威行為とも見なしうるわけです。歩きまわり黒く日焼けした肌をしたドロシーを、フランケンシュタインの物語を書いたメアリー・シェリー(1797-1851)とともに女性解放をうながしたフェミニストの一人とみなすのも妥当でありましょうか。

5 大都市ロンドンを歩く

これは不思議な現象なのですが、都市化が進行し、反動として田園に人々が関心を抱きはじめた頃、ほぼ同時に「芥のかたまり」とみなされていた都市に対して、同様な関心が集まりだし、都市を逍遙、彷徨、徘徊するといった「都市歩き」の伝統が、新たにこの時期に現われてきます。20世紀の文学的総決算ともいえるジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』(1922年)はまさにこの伝統に与^{くみ}したものです。やがて女性が街を散策し、ウィンドウ・ショッピングが発生するような文化現象を生み出していきます。こうした現象はいかにして生まれたのでしょうか。

このような動向を伝える記念碑的な作品があります。詩人ジョン・ゲイ(1685-1732)の『トリヴィアーロンドン街路歩行術』(1716年)は、「歩行詩」の典型としても称してよい作品で、都市生活に慣れた先達が語り手となって、地方から都会へ上京してくる新参者に対して、危険と誘惑に満ちたロンドンの街路の歩き方を、また同時にそのあふれる魅力を伝えようとする作品です。当時、アムステルダムを抜き世界に冠たる大都市となったロンドンの〈光と闇〉を同時に開示した詩作品ともいえるでしょう。

また一面、『トリヴィア』は17世紀後半から18世紀初頭、世界都市に台頭してきたロンドンの姿を描いているだけではなく、古代ローマの「路地」をも描写しているのです。というよりも、古代ローマと現代ロンドンという二大都市を〈平行化／重層化〉させて、両者をインターテキスト関係におき、テキストとテキストとの交響をかなでみせることで、新しい「文学的な」都市を創造しようとさえ意図しているのです。

まずタイトルに着目してみましょう。『トリヴィア』とはラテン語で「三叉路」を意味しますが、同時にこ



図11 ジョン・ゲイ

の語はギリシアの女神ヘテカーを表しています。他のギリシアの神々と同様、ヘテカーには二面性が付与されています。「呪術と生命・出産」をつかさどる創造神なのです。前者としての存在は、夜の都会の十字路などに姿を現し、妖怪のような威圧感を示す魔女そのものであり、黒魔術の本尊として崇められます。このタイトルからゲイが意図しようとしたことが明らかになってきます。18世紀初頭のロンドンもまさにこの呪術をふるう魔術師と創造の女神が同時に君臨する場に他ならなかった、ということです。

そして詩のなかで頻出するローマの詩人たちの作品への言及・引用・暗示が私の論点を補強してくれるでしょう。エピグラムとして引用されているウェルギリウスの『牧歌』をはじめ、ホラティウス、ユヴェナリス、オヴィディウス、ホーマーなどの教訓詩、牧歌、叙事詩などがあふれ、まさに総体としての詩は、古典詩の「織りもの」そのものと称してもいいでしょう。

ここに至り、『トリヴィア』の構成からゲイの詩的な意図がはっきりしてきます。この詩を単なる都市へのガイドブックにするのではなく、偉大な古代ローマより脈々と流れる詩の伝統の末尾につなげることで、ゲイは英詩の伝統をより活性化しようとしていたのです。だから『トリヴィア』を読むことは「現在ロンドンの街々」と同時に、「古代ローマの街々」を歩くことになるのです。いわば詩による「歴史的往還」とも言い換えられるでしょう。

ゲイ(図11)が醸成した歩行を中心にしてテキスト化する文学はその後、綿々とイギリス文学の豊かなひとつの脈を形成していきます。

たとえばワーズワスは『序曲』(1805年)のなかで、「セントポール大寺院の目もくらむような尖塔、ウェストミンスター墓地、ギルドホールの巨人像、ベドラム精神病院……無数の街路」が縦横にめぐるロンドンの街のなかに、若き日の「名市長となるホイットントンが意気消沈して石畳に座りこんでいる」(第7篇)姿を彷彿とさせます。またトマス・ド・クインシー(1785-1859)は『阿片常用者の告白』(1822年)のなかで自己に仮託した、歩きまわる主人公を雑踏にまぎれこませ、心身をさいなむ憂鬱症から逃れるくだりを語り、ジャーナリスト、リー・ハント(1784-1859)は、「塵芥舞う日」のロンドンの雑踏を活写し、小説家ヘンリー・ジェイムズ(1843-1916)は、「霧雨そほ降る現代の魔界バビロン(ロンドン)」のなかで歩を進めながらこの大都市を観察しています。

最後にこの都市歩きの伝統が現代思想にも肥沃な見解を与えている事例を紹介しておきましょう。都市を歩くことで観察を下し、自らが同化し、よりとぎすまされた目で群生する都市生活者をとらえる「まなざし」は、詩人シャルル・ボードレル(1821-67)の目を通して帝都パリの姿を回想し、自らの思惟のなかに都市を再創造させる契機として観察する歩行者〈フラヌール〉を想定した思索家ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)のそれと酷似しています。未完の大作『パサージュ論』(1927-35年)のなかにはディケンズの歩く作中人物を克明にたどろうとする思索家の姿を見出せるでしょう。ロンドンとパリを「歩行」で結びつけることで、ベンヤミンは自らの夢＝都市論を展開していたのです。

6 ペデストリアニズム

ところが歩行が思索するための一助となるような方向とはまったく異なる歩行がヴィクトリア朝にまだならない19世紀初頭に興隆をきわめるようになります。歩くことが精神性よりも肉体・身体性を誇示する耐久競歩ともいえるペデストリアニズムがロンドンを中心に、やがて国中に流行していくようになります。

ヴィクトリア朝時代になっていっそう盛んになっていく運動ですが、歩行という営為がこれほど身体性を強く打ち出したことはありませんでした。こうした競歩者をペデストリアンといったのですが、多くは労働者階級、下層階級の人たちが多かったのです。こうしたペデストリアンの一群には入らないスターが登場します。キャプテン・バークレー(1779-1854)(図12)



図12 キャプテン・バークレー

その人です。バークレーは現在もあるバークレー銀行の末裔につながる出自であり、バークレー家は古くから肉体を誇示した一族でもありました。

バークレー・マッチ バークレーが他のペデストリアンたちと異なっていたのは、軍人であったという点です。「キャプテン」という呼称はそこから来ています。バークレーを有名にしたのは1000マイルを1000時間かけて、1000ギニーの賞金獲得に覇をかけるという「世紀の戦い」、バークレー・マッチ(1809年)でした。

ほぼ1600キロの距離を二人の競歩者が競うわけです。想像されるように昼間は歩き、夜間は就寝するというようなレースではありません。24時間すべて活用して、歩き続けるというものです。つまり一時間のうちに1マイル歩き、休憩を挟むという歩行です。具体的にいいますと、午前1時、出発時間は1時1分、ほぼ1マイル1600メートル歩いて1時18分に目的地に着きます。イギリスの道路は正確にマイル標が設置されていますから、厳密に距離が測定できます。そして、午前2時まで身体を休めて、また歩き始めるのです。

バークレーの記録—全記録が残っていて驚かされるのですが—を見ると、実に規則正しくこの周期をくりかえして行きます。1000マイルをほぼ42日間かけて踏破しました。就寝、食事などすべて日常生活もこのレースのなかに含まれています。競技中に摂った食事から飲み物まで記録されているのですが、チキンの冷肉を食し、ビールを傾けている日も珍しくありません。夜中の2時、3時、4時、明け方の5時、6時、7時…というように1600メートルの距離をほぼ16分から18分かけて歩いていくわけです。これを合算すると一日24マイル歩き、296時間、延べ42日間かけてバークレー

は歩き抜きました。対抗者は早々に脱落し、レースはパークレーひとりで闘ったのです。

レースが行われた当日の天候も明記されています。雨が降ろうが、強風が吹こうが、レースは続行されました。夏でありましたので、熱が競技者に与える影響は相当なものであったと想像されるわけです。

イギリスは何でも賭けの対象にするくらいギャンブル好きのお国柄ですから、当然、このパークレー・レースも賭けの対象となりました。国中が注目し、国王までパークレーに賭けたと伝えられています。『タイムズ』紙には毎日、前日の記録が克明に掲載されました。ここにお見せしますのは、トマス・ローランドソン（1756-1827）という風刺画家がパークレー・レースのゴール直前をとらえた戯画（図13）です。この画からは当時の興奮が伝わってきます。さわいでいる農夫やサンドウィッチやワインを手にして、パークレーの競歩を愉しんでいる者もいれば、高みの見物を決め込んでいる見学者もいます。大切なことはここにほぼ全階級の人々が集まっている点です。イギリス国民すべてが注視していた一大イベントであったことがわかるのです。パークレー自身もこのような好奇の目を十分に意識していました。フランネルに身をつつみ、ストッキングをさり気なくあしらったスタイルはあくまでも「ダンディ」であり、道路は彼にとって「舞台」でもあったわけです。

この歩行競技を闘いぬいたその日に、パークレーはドーヴァーに繋留していた軍艦に舞い戻り、対フランス戦争に参戦していきました。彼が軍人であったことはいたく英国国民の胸をうちました。



図13 パークレーのゴールイン

ペDESTリアンの群像 当然、多くの追従者が生まれました。パークレーを模倣するペDESTリアンが国中にあふれました。そうしたペDESTリアンはかならず自分自身の記録を記載した小冊子を作成します。それを見ますと、つねに伝記がそえられてあるのです。

そこに記載されているのは、パークレーのような身分の者は皆無です。ほとんどが労働者階級の身分の低い人々です。自らの足で卓越さを示し、一財産をきづこうとした者ばかりです。このようにペDESTリアニズムが賭けの対象となっていくにつれて、品性、道徳を重視するヴィクトリア朝時代のエトスと軋轢あつれきを生じていきます。その結果、ペDESTリアニズムは終息していくのです。パークレー自身もボクサーの育成などの仕事を手がけた後、馱馬車事業にのりだし、馬にわき腹をけられて、それが原因で亡くなりました。

7 アルピニズムの諸相

レズリー・ステイーヴン とは言え、パークレーは国民的な英雄でしたから、国家的事業で出版されたイギリスを代表する『英国人名辞典』に立項されています。その項目を執筆したのがレズリー・ステイーヴン（1832-1904）（図14）です。ヴィクトリア朝を代表する思想家のひとりであります。小説家ヴァージニア・ウルフの父親であり、小説『燈台へ』のラムジー氏のモデルと言えいいでしょうか。ステイーヴンはその項目のなかで「精神性を追求せずに、身体性に傾いた」パークレーの歩行を、「歩行の本来の意識」から大きくはずれるものとして、退けます。



図14 レズリー・ステイーヴン

なぜ拒否したかという点、ステイーヴンこそ「歩くこと」に精神性を深く求めた人であったからです。ウルフはステイーヴンにとって、「歩く」という行為は特別な意味をもつものであった、と述懐しています（V.ウルフ「父の思い出」[1932年]）。彼はすぐれた

歩く人でありました。幼少の頃からよく歩いたのですが、ケンブリッジ大学に在籍していた時、ボート部に属していたのですが、ロンドンの会合に出席する際、ケンブリッジ＝ロンドン間を歩くことをまったく厭いませんでした。ロンドンで食事を終え、また歩いてケンブリッジへ戻るということすら珍しくありません。やがてスティーヴンは、神の存在を人知の超えるところにあるとして、不可知論という宗教的立場をとりまします。当然、宣誓できないので、大学に教育者として残ることはできません。ロンドンでジャーナリストとして身を立てることにになり、文芸評論、伝記、哲学、道徳などに関する著述に健筆をふるい、『コーンヒル・マガジン』という雑誌の編集にも携わります。やがてヴィクトリア朝を代表するジャーナリストになるのですが、この時期にスティーヴンの歩くことに大きな転機が訪れ、意味を深めていきます。

すでにイギリスではアルプスの山々を登攀する登山熱が浸透していました。1840年代、スイスに鉄道が敷設され、時間、費用の両面が大幅に軽減されました。1857年、アルペン・クラブが設立され、やがてスティーヴンは会長になります。当時の登山者はアルペンストックとロープだけの装備で、このような軽装で断崖絶壁に挑戦していくわけです。女性も最初は氷河見物から始まり、やがて登山をするようになります。その長いスカートで登山する姿にはただ驚かされるばかりです。言うまでもなくスティーヴンは神に一步近づくために歩を山頂へと進めました。だから初登頂をもくろむ多くの登山者とはまったく動機が異なっていました。スティーヴンと同様に、科学者ティンダルなど同時代の



図15 アルバート・スミス

不可知論者たちが登山にこぞって熱中したのは興味深い現象で、一考に値するテーマです。

アルバート・スミス ここでイギリスのアルプス熱にもふれておきましょう。というのも歩行が文化現象と絡まって、興味深い事象を生み出していったからです。アルプスの峰を人々に近づけた人にアルバート・スミス（1816-60）（図15）がいます。彼は最初、医者志望だったのですがジャーナリストになり、『パンチ』誌などに健筆をふるうようになります。幼少の頃、『シャモニーの農夫』という牧歌的なアルプスを描いた本を親からもりました。そこには理想的なアルカディアが広がっていたのですが、同時に遭難事件も生々しく描かれていました。スミスは平安のなかにひそむ突然の死という構図をしっかりと胸にきざみ、後年、この二項対立を巧みに使って、一大パノラマをロンドンっ子のまえにひろげてみせるわけです。

スミスが目標とした頂は「山々の王」と言われていたモンブランです。みずからも「アルバート大王」と自称するくらいの思いがあったのか、この「山の王」を征服しようと決意し、ついに決行する日が来ました。1851年8月12日のことです。子羊の脚肉4、羊の肩肉4、仔牛肉6片、牛肉半頭分、鳥肉11、鶏肉35そしてパン20塊、棒状チョコレート6ポンド、チーズ10塊、さらに干しスモモ6箱を、シャンペン、ワイン、ビールなど、何十本もの飲料水とともに案内人20人の背中に背負わせてモンブランの斜面を登って行きました。晴れ間をみて、ついにスミスはモンブラン山頂に登り切る。歓びを爆発させ、山頂で盛大なパーティ（図16）が催されたが、猛烈な眠気に襲われ、つい目を閉じてしまいます。次に目を開けたときも大雪原が広がっていて山頂にいる充実感にひたってしまいました。スミス一行の登攀を麓のホテルから多くの人々が望遠鏡で眺めていました。下山してみると、モンブラン征服を



図16 山頂での乾杯

祝う大祝宴会がまちかまえていたのです。そして一週間後にはスミス自らが書いた「登攀記」が『タイムズ』の紙面を飾ります。おそらく登る前からこの記事を書いていたのでしょうか。スミスは何事にも機を見るに敏なジャーナリストでした。

パノラマ『モンブランショー』 1852年3月、ロンドンの中心地ピカデリーにあるエジプシャンホールでついにスミスは『モンブランショー』の興行を立ち上げました。シャモニーにあるスイス風山小屋を舞台の上につくり、ロンドンを旅立ってからモンブランに登り、下山するまでの様子を彼が講談師となって語るのがあります。聴いている人々はヨーロッパ旅行をし、モンブランの斜面に立つという「追体験」をするわけです。娯楽と教養が一体となったヴィクトリア朝特有の「見世物」に仕立て上げたわけです。ヴィクトリア女王やアルバート殿下をまえにしての天覧興行も華々しく打たれ、『モンブランショー』（図17）は大成功をおさめます。6年間ものロングランとなり、30万人の人々を興奮で酔わせました。細部の演出にも凝っていて、当時、イギリスにはまだいなかったセントバーナード犬を二匹会場に連れ込み、首からぶら下げたかごにチョコレートを入れて客席を巡回させるのです。会場で産気づいた、このうちの一匹が仔犬を二匹産み、一匹をヴィクトリア女王に、もう一匹を小説家チャールズ・ディケンズに献呈されたという後日談まで生みました。

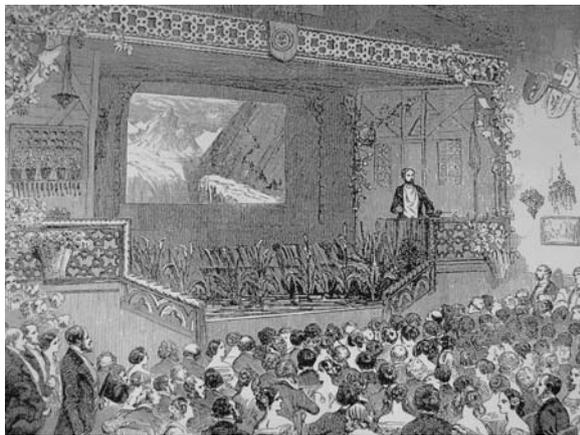


図17 熱弁をふるうスミス

『アルプス登攀記』 1857年にはアルパイン・クラブが設立され、いわゆるイギリス登山の黄金期を迎えようとしています。そうした隆盛をきわめている最中にエドワード・ウィンパー（1840-1911）の「マッターホルンの悲劇」が起きてしまいます。アルプスの山頂はほとんど征服されてしまっていたのですが、ガラスの壁といわれたマッターホルンだけは未登頂でした。

1865年7月15日、ウィンパー（図18）を含む8人の



図18 エドワード・ウィンパー

登山家が山頂へ向かいました。「巨大な自然の階段」を這うように登っていき、「頂上までわずか200フィートほどの優しい雪」を踏みしめてついに山頂にたどり着く——「もうロープをはずしても差しつかえなくなったので、クロー [ガイド] と私は、ロープをはずし、先を争いながら駆け出した。そしてほとんど同時に山頂に登りついた。午後1時40分であった。ついに頂上に立ったのだ。マッターホルンは征服されたのだ。雪の上にはひとつの足跡もなかった」。ウィンパー一行は、「すべての山々が目の前にあり、アルプスの山で見えないものはないくらい」の眺望を楽しみ、「輝かしき生涯を圧縮したようなひととき」を味わいます。

ところが下山の時に悲劇が襲うのであります。岩場の急斜面から人間が転がり落ちていく様子をウィンパーはスローモーションフィルムを撮っているかのように冷静に描いています——「その瞬間に、ハドウが足を滑らしたのだ。クローの背なかにぶつかり、彼を突き落としてしまった。クローが驚きの叫び声を上げるのを聞いた。そしてクローとハドウが、飛び落ちていくのが見えた。次の瞬間には、ハドソンが引きずり落とされた。それと同時に、フランシス・ダグラス卿も落ちていった。すべては一瞬のうちの出来事であった。クローの叫び声を聞いたとき、老人ペーテルと私は足場の岩の上に、しっかりと足をふん張った。老ペーテルと私の間はロープがぴんと張っていた。だから衝撃は私たち二人に、まるで一人の人間に襲いかかるように、ぐうんとやってきた。私たちはロープを食い止めることができた。しかし、そのロープは老ペーテルとフランシス・ダグラス卿との間で、ぷつりと切れてし



図19 墜落 (ウィンパー刻)

まった。ほんの数秒の間、私たちの仲間が仰向きになり、両腕をひろげ、何かにつかまろうともがきながら、滑り落ちていくのが見えた。見えている間は、まだ一人も負傷していなかった。一人ずつ視界から消え去っていった。そして四千フィートもの下のマッターホルン氷河へ、断崖から断崖へと飛ばされながら落ちていったのだ。ロープが切れた瞬間に、彼らを救うことは絶望になったのであった」。この遭難事件 (図19) はイギリス本国でも大変な騒ぎを起こし、女王は「なぜ登山でイギリスの有能な若者の命が失われなければならないのか」との懸念を示し、登山禁止令を出す寸前のところまで行きました。

ウィンパーの無念さは、自らの登攀記の「マッターホルンの初登攀」の章につけた、ユーリピデスの「うまく成功しさえすれば立派な人物のうちに数えられる。人は物事を結果から判断しがちである」という警句から窺えます。『アルプス登攀記』は山岳文学の傑作とされ、高い評価を今日でも受けています。だが、この本を『アルペン・ジャーナル』で書評したスティーヴン (図20) は大方とは違う評価を突きつけました。こんな不用意な登山ではもっと早くに遭難していたと非難し、ウィンパーの登山者としての心構えを強いさめました。

歩くという行為が山へ向かったとき、命を失う危険に直面します。ウィンパーが述懐する言葉——「あの最後の悲しい記憶が私のまわりに漂いつづけている。流れていく霧のように日の光をさえぎり、楽しかった思い出さえ凍らせてしまう。言葉では言い尽くせないほどの大きな喜びも数多くあった。それとともに思い



図20 山岳ガイドとスティーヴン (右)

出しても苦しくなる悲しみもあった。これら一切のことを顧みてもなお私は、山へ登りたいというなら、登りなさいと言いたい。ただし、勇気と力があっても慎重さを欠いていたらそれは無に等しいということを忘れないで欲しい、そして一瞬の不注意が一生の幸福を破滅に陥れるものであることも忘れないでほしい」——は、まさにスティーヴンの訓告 (図21) を裏打ちしています。そして、「何ごとをあわててやってはならない。一步一步をしっかりと踏みしめて、つねに最初から、終わりがどうなるか、よく考えて行動してほしい」という自戒で、この名著は終わるのですが、歩行がまさに人生の一步という人間らしい生き方を示唆する比喩でもって語られています。

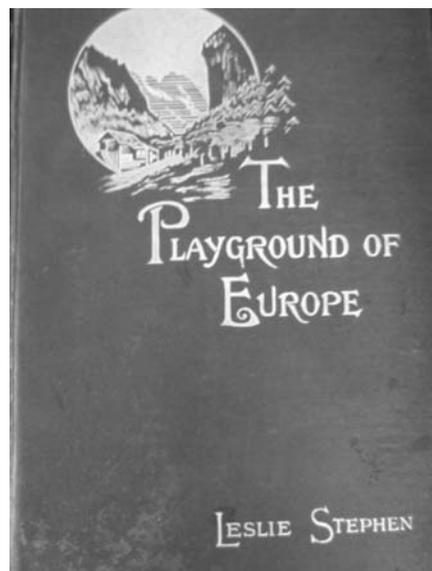


図21 スティーヴンの山岳書

日曜遊歩会 「歩行の文化史」をたどるために、もう一度スティーヴンの後半生に話をもどしましょう。スティーヴンの後半生の歩行は、今日の私たちの歩行に指針を与え、きわめて似た様相を呈してきます。雑誌の編集長を辞した彼のもとに国家的な事業と言える『イギリス人名辞典』の計画がもたらされます。この一大事業と並行しながら歩行はつづいていくのです。アルプス登山をする時間的余裕もなくなり、体力の衰えをみたスティーヴンは隔週に一度、ロンドン郊外へ自動車で行き、また都心へ歩いてもどってくるという、「日曜遊歩会」(The Sunday Tramps)という集いを設けました。参加者には時代を代表する知識人が集まり、いわば歩きながら知的な論議を重ねていきました。アリストテレスの逍遙学派とよく似た側面があります。この知的交流会に加わった人々には、法律家フレデリック・ポロック、『マインド』の初代編集長クルーム・ロバートソン、法律家F.W.メイトランド、英文学者W.P.ケア(ロンドン大学での夏目漱石の指導教授であった)、詩人ロバート・ブリッジスなどの知識人から構成されていました。15年間で252回の遠出がなされたが、スティーヴンは余人に代えがたい「ガイド」を果たした。名所旧跡を訪れ、歴史的異境を感じるといった文化的営為にとどまらず、この会にはイデオロギー的な示唆も含まれていました。安息日である日曜日をことさら選び、運動に興じるのは「反社会的」とみなされても仕方がなかったからです。とくに礼拝する時間に堂々と教会の前を闊歩していくのは、どう見ても一種の示威行動とみられたのです。



図22 ウォーキング・クラブ

会の100回を記念して、進化論者ダーウィンの邸宅に寄り、ディナーをとっています。小説家ジョージ・メレディスは、「この歩行会に誰か速記者がついて、交わされる話を書き留めておいたら後世に資する」と、

この知的交流を評価しています。日曜遊歩会は、スティーヴン亡き後も、歴史家G.M.トレヴェリアンたちが衣鉢を継いで発展させていき、歩行と知の営みがたえることはありませんでした。

ただここで注意しておかなくてはならないのは、この時期にウォーキングを実践していたのは何もスティーヴンの日曜遊歩会だけではありませんでした。イギリス各地にこのような歩行の同好会(図22)が出現し、その活動を盛んに展開していたことを忘れてはなりません。それは単に歩き続けるというだけでなく、目的地まで自転車で、または自動車で行きそこで歩行を愉しむというような形態に姿を変えていきます。19世紀末にはサイクリング熱がイギリス全土を支配しますが、それと同時にウォーキングもより盛んに行われていたのです。

8 ウォーキング・エッセイの流行

歩く牧師 市民生活のなかに定着したウォーキング活動はまず文学の領域で開花することになります。19世紀末から20世紀中葉にかけて、じつに多くのウォーキング・エッセイが書かれ、イギリス文学のお家芸であるエッセイ部門をにぎわせます。つとにアメリカでは『森の生活』『市民の反抗』を書いたH.D.ソロー(1817-62)が自然の中を歩くことが自然擁護の一行為であると標榜し、歩くことに意義を認めています。ソローのいうウォーキングはソタニング(散策)の異名できわめて宗教色の濃いものでありました。「中世の頃、田舎をさまよい聖地におもむく(à la Sainte Terre)という口実のもと物乞いをして歩きまわっている」人を、子供たちが「聖地に行く人=怠け者」と呼んだことからソタニングという言葉は生まれてきた、とソローは説明しています(「ウォーキング」[1862年])。

このソローのようにウォーキングを一種の宗教的擬似行為とみなし、自ら実践して、ウォーキングの素晴らしさを説いた牧師(the Walking Parson)がいました。本名はA.N.クーバーと言いますが、ウォーキング啓蒙書を多く書き、これまで比較的上流階級の行為とされてきた歩行を労働者の人々の間にも流布させようと活動を続けました。といっても文筆をなりわいにしていただけではありません。長い距離を歩き抜くというのがクーバーの信条であり、その結果、それを伝達すべく多くの本(図23)を書いたというわけです。ジョン・ラスキンがその『ヴェニス石』の

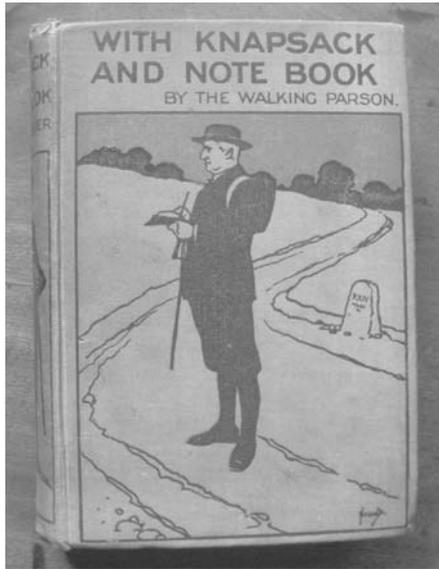


図23 歩く牧師

中で古きよき旅が絶滅したと嘆いているのに異議を唱えようと、多くの先人にならって歩いて永遠の都ローマへ向かい、歩く旅の実践例を世に問います。サイクリングがクーバーの時代に大流行していたのも見逃せません。この「歩く牧師」は人々がスピードに酔い、筋力が退化することを憂いました。人間はもっと道を歩き、大地と接する必要があるとスピード万能の時代に警鐘をかきならしたのです。

杖1本をたずさえて、少額の金を三ヶ所に分散させて懐中におさめ、軽装でイギリス国内を歩きまわり、ヨーロッパの方へも足をのばし、ほぼ30年以上にわたり、クーバーはウォーキングの効用を歩きながら広めていきました。靴製造メーカーとタイアップするという実益的な面もそなえた憎めない牧師は、『ウォーキング・パーソンの散策』(1902)、『ナップサックを背に、ノートを手』(1906)、『長距離歩行のすすめ』(1907)、『歩行の教え』(1909)、『教育としてのウォーキング』(1910)等々、陸続とウォーキング本を出版し、ウォーキング啓蒙に大いに寄与しました。鉄道旅行が日常風景の中に取り込まれた時代とはいえ、一般庶民にはまだ手をのばせるところにはありませんでした。費用のかかる海外旅行もクーバーは歩いていくことを勧めました。費用、健康の面からも一挙両得というわけです。ウォーキング・ツアーをしている間、生活は一日6ペンスの範囲で営むべきであるという質素を旨とする、クーバーの信条は、大英帝国の精神的支柱ともなった「マスキュラー・クリスチャニティ」にも通じていたのです。まさに歩く牧師こそその信条を体現していた人物にほかなりませんでした。

「いつも黒い正装に身をつつみ、食事のときにはナプキンとフィンガーボールを欠かさない生活を強いられている人々にこそ、私は道路で謳歌する自由を推奨したい。私たちがおこなっている生活はきわめて人工的なものであり、それゆえに自然にもどり、自然に即した生き方をするにはいっそう愉快になるのだ」と、「歩く牧師」クーバーは高らかに宣言します。人為的な生活を営まざるをえない都会生活者にこうしたメッセージは訴える力があつたと思わざるをえません。

9 「歩く権利」

ウォーキング・パーソンの活動はささやかな一助でしかありませんでしたが、「歩くこと」への関心が深まったのも事実です。男女問わず野原を遊歩する団体や男性だけに限定した路を歩くウォーキング・グループが組織されだしました。1903年に生まれた「マンチェスター・ペDESTリアン・クラブ」はそのなかでも大規模で有名な団体となります。

歩行の意図はともあれ、多くの市民たちが森林、田園、田舎などに自然を求めて歩きだしたことが思わぬ文化の波を引き起こしていたのです。特にロンドン郊外をロンドン市民が逍遙し始めたのは、何よりも注目に値します。こうした余波は古来から綿々と続く土地制度にも変革をもたらし、土地所有の問題から余暇のあり方にまで影響を及ぼしていきました。イギリスの街を歩いていると方々に「フットパス」という標識(図24)を目にするはずです。この小さな標示板には、歴史的意義が深く封じ込められているのです。そこから緑化運動、自然保護、土地制度、余暇活用などのキーワードがたちまち浮き上がってきます。とりわけパブリック・フットパスは森や野原の自然道を、畑や牧草



図24 フットパスの標識

地の畦道を市民が歩くことができる「歩く権利」(rights of way)を認められた歩行道であります。

土地所有者と、その土地を横切っていく歩行者が、衝突し一悶着起きるのは自明です。対立する権利がぶつかり合うのですから当然です。公的な土地ならばいざ知らず、私有地にさえ、この「歩く権利」は認められています。まずこのイギリス特有の「歩く権利」は、複雑な過程をえて生み出されてきたのでその歴史的事実を知らなくてははいけません。

第一次世界大戦後、多くの疲れた兵士たちが帰国し、癒しを求めて郊外を歩こうとしますが、大部分の場所には「立ち入り禁止」の立札が立っていました。すでにイングランド北部ではペニン丘陵への立入りを、またスコットランドではパース丘陵への自由な歩行を求める運動が起きていました。こうした一連の示威行為に対して、地主は「立ち入った者は厳罰に処す」という立札で応じました。地主は「森の嘘つき」(‘wooden liars’)と呼ばれました。というのも、そうした土地に入ることは何も犯罪行為ではなかったからです。ところが現実には切実な衝突が数多く起きていました。そのような時に「歩く権利」をめぐる、抜き差しならない事件が起きてしまいます。

キンダースカウト事件 1932年の春、「英国労働者スポーツ組合」(British Workers’ Sports Federation)の組合員数名がピークディストリクトにあるブリークロー丘陵で、その地を管理する猟場番人から追い出されるという事件が起きました。キンダースカウトはピークディストリクトのもっとも高い所にあり、黒煙けむる工業都市マンチェスターを眺望できました。

締め出しをくらい怒り心頭に発した労働者たちは、多勢でキンダースカウトへ侵入しようとして目論みます。1932年4月24日、よく晴れた日曜日の朝のことです。400名以上の労働者たちがヘイフィールドという小さな町を出て、キンダースカウトを目指しました。労働者たちは自らの「歩く権利」を実践しようとしたわけです。だが、目的の地に到着するまえに、雷鳥の管理をしていた番人たちと諍いを起こしてしまい、番人のひとりが転倒して踝を傷つけてしまいました。その行動が罪に問われ、5人の労働者が逮捕され、ダービー裁判所で17カ月の実刑判決をうけてしまいます。

だが、皮肉なことにこの事件は英国各地に散在していた歩行グループの結束力を強める結果を招き、その後、団結した歩行グループが「歩く権利」を求めて、大きな推進力を果たしていくことになりました。しかるに「キンダースカウト事件」(図25)は、イギリス



図25 「キンダースカウト事件」

のウォーキング文化史のなかで、ひとつの転換点を明示することになったわけです。

急いで「歩く権利」をめぐる重要な出来事を簡単にまとめておきましょう。国立公園の制定にはまだ第二次世界大戦後をまたねばなりません。つまり、「国立公園、カントリーサイドアクセス法」(The National Park & Access to the Countryside Act)が国会で合法化されたのは1949年のことなのです。

この法案に続き、長距離の歩行道が定められ、ピークディストリクトから南部地方に至るペナイン道(the Pennine Way)はその最初の大規模な歩道(432Km)となったのです。1965年のことでした。こうした長距離道の設置により、ウォーキングはイギリス全土で活性化されていくのです。

次に想像してみてください——ハムステッドヒースやイッピングフォレスト、ウインブルドン・コモنزのないロンドン、ニューフォレストのないハンプシャー、ダートムーアのないディーヴォン、ミンシンハンプトン・コモنزやペインズウィック・ビーコンのないコッツウォルズ等々を。イギリス全土から自然を楽しむ土地(コモنز)がすべて消滅してしまったら、果たしてあの「イギリスの風景」は存在したでしょうか。

言うまでもなく「歩く権利」は、世界の各地で起きている環境問題をめぐる紛争に対応するコモنزの提示を先取りしているとも言えるのです。森、川から海洋にいたるまでの地球規模でのコモنزにまつわる問題系がイギリスの「歩く権利」に要約されていた、と言える言い過ぎでしょうか。

10 コッツウォルズでの散策

さて、ここでコッツウォルズでのウォーキングを疑似体験してもらいましょう。今日お手元に配りました冊子はコッツウォルズで行なわれる9月から12月にかけてのウォーキングの日程表です。ご存知のとおり、コッツウォルズは日本人観光客にもっとも人気のある観光地です。風光明媚で手つかずの自然がそのまま味わえるからでしょうか。たとえば7月11日土曜日のところをご覧ください。

朝の10時に集合して、ほぼ7マイル約11キロの距離を4時間かけて歩くわけです。ランチにはパブに寄り、サンドウィッチを片手にビールの杯を傾けるといふ楽しみが待っています。ブロードウェイという丘を散策するわけですが、今年はコッツウォルズではヤマウズラ、ハウジロ、タケリ、スズメ、セキレイ、キジバトの6種類の野鳥を特定して保護に力を入れようとしています。またこの誌名は『コッツウォルド・ライオン』(図26)というのですが、当地では羊毛業が盛んで、毛がライオンのようにふさふさした羊が飼育されています。それにならったのでしょうか。ライオンのたて髪のような羊の下に「空積みの壁」があしらわれています。これは実にイギリスらしい、コッツウォルズならではの風景です。2億1千年前のジュラ紀にできた「魚卵岩」という岩石からできているからです。それらは18世紀に激しさを増す囲い込み運動にも使用されました。羊が他人の土地へ移るのを防ぐわけです。つまり、私たち歩く人は、時間、歴史のなかを、積み石



図26 『コッツウォルド・ライオン』

の時空間のなかをくぐっていくのです。1966年にはこの積み石はコッツウォルズの歴史的景観として認定されています。この岩は中世に羊毛業が盛んになってきたこと、クロムウェルとの戦いの折、ここに議会派が身を隠したことも伝えてくれます。歴史的故事来歴が走馬灯のようにはじめぐるわけです。

歴史的時空を自由に逍遥するのもウォーキングの醍醐味であり、歴史の垂直的な時間を読み取ることも確かに心躍ることでしょうが、「現在」も忘れてはいけません。歴史とはまったく異なる側面、つまりここに生息している生物にも注目してみましょう。ハチ、野ネズミ、コケ、キアオジ、エゾデシダ、チドメグサ、トカゲ、ミソサザイなどの動植物の名前を即座に挙げるができます。子どもたちの自然観察にはうってつけです。また大人たちも童心を取り戻すことができる瞬間です。

もうお分かりかと思いますが、私たちが歩くということは、今日お話し申し上げた歴史的過去を追憶すると同時に、その歴史的過去が現在に重なる、「その一瞬」にも立ち会うことができるのです。これぞウォーキングの特権的な醍醐味ではないでしょうか。

このドライストーンからできた積み石は4000マイルほぼ6400キロに及ぶと書いてあります。英国人は自国の歴史を非常に「誇り」にしていますから、つい自慢をします。古さ、大きさ、長さなどで世界一を目指したいわけです。この空積みの長さは、万里の長城に匹敵すると書いてあります。でも、中国のそれは8800キロもありますので2000キロほど足りません。でもイギリス人のお国自慢に免じて、「これくらい」の誤差は大目に見てあげてください。悪気はないのですから。とは言え、じつに遠大で目がくらむような長さには変わりありません。

結びにかえて――

日本におけるウォーキング

では、本講演の最後に近代日本におけるウォーキングの発生と展開について簡単にふれておきましょう。1868年に開港した神戸は日本における西洋スポーツの揺籃の地ですが、その地でウォーキングがどのように発展していったかをまず述べていきましょう。

1888年(明治21)年、日本近代登山の父と称されるようになるイギリスの宣教師ウォルター・ウェストンがセントアドレス教会(現、セントミカエル教会)の牧師として神戸に着任しました。1895年に帰国するま

で日本に住み、その間、日本アルプスの峰々を登攀し、1896年、その記録をしるした記念碑的な著作『日本アルプスの登山と探検』(*Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*)を出版します。「歩く」ことを通じて、ウェストンの感化力は深く、文化拠点である居留地で影響力をもっていた(日本で初めてゴルフ場を開く)A.H.グルーム、H.E.ドートン、J.P.ワーレンなどの有力者を動かし、市街地の裏にそびえる六甲山の魅力を開花させていったのです。ウェストンが1918年に著した『極東の遊園地』(*The Playground of the Far East*)には、古代ギリシアと近代日本の両国を比べ、風景、迷信、民話、社会生活について比較文化論が展開されています。また富士山の山岳信仰についても深い知見を示唆していて、この「歩く英国人」は、日本文化の発信者でもあったわけです。

ウェストンはイギリス山岳会長に日本アルパイン・クラブの創立許可を求め手紙を出し、その結果、日本山岳会の設立につながっていくのです。設立の記念にウェストンの登山愛用品を展覧したのですが、それはリュックサックが「日本人の目の前に広く紹介された最初」であったと言います(岡野金次郎「小島[烏水]と私——初期の登山とウェストンとの交友のことなど——」[『山岳』[1949年])。

やがて早朝に山を歩き回り、遊歩する習慣は神戸市民にも感化力を及ぼし、1910(明治43)年に「神戸草鞋会」が発足し、この会は「神戸徒歩会」(Kobe Walking Society)へと発展し、会員を増やしていきます。続いて、朝日新聞記者、藤木九三(1887-1970)を創設者とする「ロック・クライミング・クラブ」が結成され、日本の山岳熱を支える一翼をになっていきます。このクラブは1925(大正14)年に藤木のロッククライミングの啓蒙書『岩登り術』を発行しました。そして、後年、藤木が書いた「アルピニズムの近代色」[近代登山の道義観]([『雪・岩・アルプス』[梓書房、1930年])などの諸論考を読めば、「歩く」という行為がいかなる全人的な意味をもつか、をうかがい知ることができるのです。

藤木はさらに「歩くこと」を基盤におく「旅」と「登山」との二者を比較して、「旅の滋味はあくまでも枯淡、静観、遁避であるのに反し、登山は多彩、躍動、進取を生命とする」という印象深い指摘をなし、「旅

は低徊、逡巡、顧眄であり、土に親しみ、大地に頼らず自らの姿を振りかえる心だとすれば、クライミングは水と岩の触覚をたのしみ、水晶のごとき峰頭に身を挺して太陽を呼びかけ、吹雲と雷鳥を呼吸する魂の跳躍である」と断言して、「歩く」という意味をさらに掘り下げています(「単独登攀考想」[『屋上登攀者』[黒百合社、1929年])。

先に言及した「神戸草鞋会」は、貿易商、塚本永堯他4名によって発足しましたが、英文の歩行マップや機関誌『ペデスツリヤン』(*The Pedestrian*)を1913(大正2)年10月1日にその創刊号を発行し、400名もの会員を擁していたのです。外国人会員が五分の一以上を占める会の趣旨として、「登山趣味を涵養し心身の錬磨」に「歩くこと」の意義を求めています。やがてこの歩行にともなう「思想」は、「神戸徒歩会」にも継承され、すでに1917(大正6)年には「日本アルプス登高会」が組織されていて、高峻岳の踏破、積雪登山への挑戦へつながっていくわけです。近代日本で起きていた一連の「歩くこと」にまつわる行動は、まさにヴィクトリア朝の「歩く」行為と軌を一にしていたことは注目に値しましょう。

さて今日の講演*は赤ん坊の「歩き初め、ファースト・ステップ」から人間の歩行を語りおこし、ウォーキングのガイド誌『コッツウォルド・ライオン』の誌上散策を試み、そして最後に日本におけるウォーキングへの影響に至るまで、ほぼイギリス文化史上500年にわたる人間の「歩行」を概観してきました。人間の一步はその足跡を残すことはできませんが、あえて消えた足跡(歩行の文化史)をたどることで、「歩くこと」を中心に据えた文化のゆるやか流れ、変遷、その「歩み」の一端をお伝えできれば講演者としてこれ以上の喜びはございません。ご静聴ありがとうございます。

*本講演は西宮市大学交流協議会の主催によって、市民対象講座事業(インターカレッジ西宮)の一環として2013年11月29日に行なわれたものです。『文化のく読み取り方』と題するイギリス文化史レクチャーの一回分で、原題は「イギリス人は何を求めて歩いたのか」でありました。お世話になった西宮市大学交流協議会の関係者の方々に深く感謝を申し上げます。